

# 本報告書の要約

## 第1章 親の目から見た子どもの学習状況

- (1) 子どもの家庭での学習時間は小学校の低、中学年ではかなり短い。が、学年が上がるにつれ長くなる傾向がある。また、帰宅後少なくとも一度は机に向かう子どもは東京よりも岡山、秋田・岩手の方が多し (表1)。
- (2) 子どもの成績は「ふつう」と答えた親が過半数を占めるが、学年が上がるにつれてその評価は分散していく (表2)。
- (3) 現代の親は子どもの教育に大変熱心で、大半は授業参観・運動会に必ず行っている。教育への関心の高さは親の学歴よりも地域による差が大きく、東京の親の関心が特に高い (表3、4)。
- (4) 学校に対する親の期待は指導の量を増やすことよりも、一人ひとりの子どもに応じるといった指導の内容に対して寄せられている。また、親の希望はかなり多様であり、住んでいる地域や最終学歴により相当異なっている (表6、図1)。
- (5) 子どもに通わせているおけいごごとの種類で最も多いのは「スポーツ」であった(40%)。地域別にみると、岡山はおけいごごと通いが盛んな地域であり、反対に秋田・岩手は全体的に低調である。東京ではとくにスポーツクラブに子どもを通わせている親が多い。また、高学歴の親には音楽、スポーツ、英会話などに通わせている者が多いのに対し、そうでない親ではそろばんや習字を習わせている者が多い (表7、9)。
- (6) 教育サービスの中で、最も利用率が高かったのは「通信教育」(27%)。学習塾への通塾率は20%であった。これらの教育機会の利用率は、おけいごごとの場合ほど親の学歴や地域により左右されない。学習塾通いを規定する一つの要因は、学校の勉強に対する親の不満の大きさである (表10、11、図2)。
- (7) 子どもの学習塾通いに対する親の態度は、社会や教育の将来像に対する全般的な予測の違いよりも、自分の子どもにどのような学歴、進路を望むかによって規定されている。学習塾に通わせている親は、子どもに高い学歴を望むとともに、大学進学に有利な中等学校への進学を望んでいる (表12、図4)。

## 第2章 学歴・教育への期待

- (1) 子どもに期待する学歴は、「大学まで」が55%、「短大まで」が13%、「専門学校まで」11%、「高校まで」13%、「大学院まで」3%。これは現在の高等教育進学率をはるかに上回る。4年制大学までの学歴を期待することが多いのは、男子、東京、高学歴、年収の高い親である (図5～7)。
- (2) 子どもに進学を希望する中学は、公立中学83%、私立附属中学6%、それ以外の私立中学4%、国立附属中学3%。ただし東京は特異で、公立志向は63%にとどまり、私立附属中学17%、その他の私立9%が多い。高学歴、年収の高い親で、公立中学への進学希望が小さい (図8～11)。
- (3) 子どもに進学を希望する高校は、公立高校79%、私立大学・短大の附属高校9%、それ以外の私立高校4%。国立大学附属高校3%。ここでも地域差が目立ち、岡山、秋田・岩手では公立高校を選択する者が9割をこえているが、東京では半数を切る49%に過ぎない (図12、表13)。
- (4) 子どもに4年制大学、短大までの学歴を期待するものは、相対的に私立附属、その他の私立、国立の中・高校を選択する者が多い (表14)。
- (5) 親の多くが進学してほしいと思っているのは、「学費が安い」(87%)、「就職状況がよい」(79%)、「家から通学できる」(75%) 大学や短大。大学進学を、コストとベネフィットの点からとらえる、道具的・手段的価値観が優勢である。高学歴層の親で希望が強いのは、「大都市にある」「男女共学」であり、ことに「入るのがむずかしい」(30%)と「育ちの良い学生の集まる」(37%)は、他の学歴階層を大きく上回る選択率となっている (図13、表15～17)。
- (6) 教養教育よりも実践的な教育、研究者養成機能よりも職業準備機能が全体として重視されており、かつ礼儀作法、生活態度の指導も期待されている。ここから浮かんでくるのは、実践的な知識・能力・技術においても、また礼儀作法、生活態度においても、職業人として一人前にしてくれる、いわば「職業大学」の姿である。中等教育卒の親たちは、高等教育卒に比べて、学校的な指導方法(出席を厳しく、親への連絡)に大きな期待を寄せ、また生活指導機能、就職斡旋機能も重視している。これに対して高等教育卒の親たちは、相対的に非学校的、非職業的機能—たとえば教養教育、研究者養成機能—を重視している (図14、表18、19)。

### 第3章 21世紀の大学と進路選択

(1) 「友人関係が広がる」「専門知識が深められる」ということに大学進学の特長があると評価している。教養・専門志向だけでなく、青春エンジョイ派もかなりの比率を占めている(特に都市部)。概して、勉強が得意な子どもをもつ高学歴の親ほど、大学進学の特長を積極的に認めている(ただし、就職・資格取得に有利という点を除く)(表20~22、図15)。

(2) 高等教育該当年齢人口の減少にともなって、大学進学率自体はのびると予測される(とくに女子)。しかし、それに比例して大学に入りやすくなるとみられてはいない。しかも、すべての大学で入学がたやすくなるというのではなく、一流大学への入学はむしろむずかしくなると予測されている。学歴格差がさらに広がるという認識も少なくなく、大学院を含めて教育による選抜のプロセスは依然として変わらないと考える者が多い(表23、24)。

(3) 18歳人口が減少しても、基本的な進路選択行動は変わらないと予想される。選抜性と社会的威信の高い方向を選ばせる傾向がある。しかし、子どもが女子の場合には、推薦入学や大学院教育には理解を示すが、そうかといって刻苦勉励をさせようとはしない。また、進路選択は家庭の経済的・文化的な環境に大きく左右される傾向がある。階層消費としての大学教育という性格は今後も続きそうである(表25~27、図16)。

### 第4章 家計と教育費負担、子どもの自立・結婚への期待

(1) 夫の年収は平均616.5万円、妻の年収は平均154.1万円、夫と妻を合計した家計の年収は平均756.6万円であった。総務庁の家計調査(平成2年)に比べて夫の年収がやや高い(図17)。

(2) 教育費を負担に感じている(とても感じている、やや感じている)のは43%、負担に感じていない(あまり感じていない、まったく感じていない)のは57%であった。また、この負担感は、おけいごとや学校外活動、学校外学習への支出額が多いほど、強かった(表28)。

(3) 教育目的の特別の貯蓄をしているのは24%、とくに教育を意識せずに貯蓄をしているのが63%であった。子どもに高い学歴を期待するほど、また、両親の学歴が高いほど、特別に貯蓄をしている割合が高かった(表29)。

(4) 生計の独立を期待するのは、男子に対して22.4歳、女子に対して21.8歳、結婚を期待するのは、男子に対して28.7歳、女子に対して26.6歳、最初の子どもの持つことを期待するのは、男子に対して30.4歳、女子に対して28.1歳であった。子どもに高い学歴を期待している場合ほど、専門・技術職や自由業を期待している場合ほど、親自身の学歴が高いほど、また年収が多いほどこれらの期待年齢は高(遅)かった(図18~20、表30)。

(5) 持ってほしい理想的な子どもの数は2.7人、これに対して、現実に持てそうなのは2.1人であった。親自身が子どもを多く持っているほど、自分の子どもに将来多くの子どもを持ってほしいと期待している。また、結婚することや最初の子どもの持つことを期待する年齢が高い(遅い)ほど、期待する子ども数が少ない(図21~26)。